

ノイラミニダーゼ阻害剤の発熱に対する臨床効果の5シーズンの成績

¹座間小児科診療所、²永寿総合病院 小児科、³市川こどもクリニック、⁴慶應義塾大学 小児科、⁵川崎市衛生研究所、⁶横浜市衛生研究所、⁷けいゆう病院 小児科

○山崎 雅彦¹、三田村 敬子²、市川 正孝³、新庄 正宜⁴、清水 英明⁵、川上 千春⁶、菅谷 憲夫⁷

【目的】インフルエンザに対するノイラミニダーゼ阻害薬 (NAI) による治療は、2010/11 シーズンには長時間作用性の新たな NAI も使用可能となった。以前からの抗インフルエンザ薬の臨床効果の検討に、新しい NAI が加わった 2010 年以降の検討を加えて報告する。

【方法】インフルエンザ様症状で小児科を受診し、ウイルス分離・PCR・迅速診断キット等でインフルエンザと診断された、主に外来患者を対象とした。熱型表で発病・投薬・解熱の日時を確認し、投薬開始から解熱までの期間、発病から解熱までの全有熱機関等を検討した。

【成績】オセルタミビルを投与した症例の各シーズンの解熱までの日数は、1 歳から 4 歳と、5 歳から 9 歳の年齢群別の検討で、2007/08 の AH1 (ソ連型) では 1.49 日と 1.40 日、2008/09 の AH1 (オセルタミビル耐性ソ連型) では 2.52 日と 1.90 日、2009/10 の AH1pdm では 1.34 日と 1.26 日、2011/12 の AH3 では 1.28 日と 1.29 日、2011/12 の B 型では 2.70 日と 2.42 日であった。オセルタミビル、ザナミビル、ペラミビル、ラニナミビルの 4 剤の発熱を指標とした効果は、オセルタミビル耐性ソ連型ウイルス以外の症例ではほぼ同等の成績であった。オセルタミビル耐性ソ連型症例におけるオセルタミビル投与後の解熱までの日数は、他のウイルスに比較して長く、特に年少児で顕著であった。また、B 型インフルエンザ症例の解熱までの日数は、A 型に比較してやや長い傾向が認められた。

【結論】長時間作用性の新たな NAI も、発熱を指標とした効果は従来の NAI とほぼ同等の効果を示した。ペラミビルは年少児や重症例に使用する薬剤として確実性が高く、他の NAI に比較して有熱期間も僅かに短い値を示したが、症例数を増やして検討を加える必要がある。

2011/12 シーズンの小児インフルエンザ患者に対するラニナミビルとオセルタミビルの使用経験

¹かわむらこどもクリニック (富士市)

○河村 研一¹

【目的】2011/12 シーズンの 3 歳から 15 歳以下のインフルエンザ患者にラニナミビル (N=221) とオセルタミビル (N=84) を投与し、その有効性を検討した。【方法】対象は 2011 年 12 月から 2012 年 4 月までに当院を受診し、発熱後 48 時間以内に治療が開始できた小児の A 型および B 型インフルエンザ患者を対象とした。なお、抗インフルエンザ剤を使用しなかった、A 型インフルエンザ 3 例と B 型インフルエンザ 5 例を対照とした。対象者に、各治療法のメリット・デメリットを、表を用い口頭で説明した後、親権者の薬剤選択希望により、ラニナミビル (投与) 群、オセルタミビル (投与) 群、対照群に分類した。対象者には、24 時間記載可能な経過観察調査票を渡し、必要事項を記入していただいた。ラニナミビルは 20 または 40mg/回、オセルタミビルは約 4mg/Kg/日 (最大 150mg/日) を投与した。発熱は体温が 37.5°C 以上上昇したものとした。【成績】治療開始後の平均解熱時間は、A 型インフルエンザでは、ラニナミビル群 42.4 時間、オセルタミビル群 32.2 時間、対照群 81.1 時間であった。B 型インフルエンザでは、55.3 時間、58.9 時間、66.2 時間であった。【結語】2011/12 シーズンの小児インフルエンザ患者に対しては、A 型ではオセルタミビルの方がラニナミビルより有効であり、B 型ではほぼ同等であった。他の項目や年齢別に検討し報告の予定である。会員外共同研究者：青山一仁、熊谷重人、鈴木美鈴 ((株) メディオ薬局)